

平成24年度 名古屋大学留学生センター オープンフォーラム

社会参加としての在日朝鮮人文学 ～磯貝治良とその文学サークルの活動を通して～

浮 葉 正 親

- 【日 時】平成24年7月22日（日）13：00～16：30
【場 所】CALE フォーラム
【共 催】在日朝鮮人作家を読む会
【講 師】磯貝治良氏（作家・金城学院大学非常勤講師）
【講 演】「わたしの文学の旅と在日文学のゆくえ」
【コメント】清水良典氏（文芸評論家・愛知淑徳大学教授）
黄 英治氏（作家・評論家）
【参加者】35名（大学院生、市民）

愛知県在住の作家・磯貝治良氏は、『夢のゆくえ』をはじめ3冊の小説集を発表する一方、名古屋で35年にわたり「在日朝鮮人作家を読む会」を主宰してきた。評論集『始源の光』や『〈在日〉文学論』、編著『〈在日〉文学全集』（全18巻）は、在日朝鮮人文学に関心を持つ人にとって大きな道標となっている。

このフォーラムでは、磯貝治良氏の作家としての側面に焦点を当てる。とくに1960年代から70年代にかけて書かれた初期の作品群に注目し、文学による社会参加を目指した一人の作家が、在日朝鮮人文学と出会い、独自の作品世界を切り開いていくプロセスをふり返る。戦争や戦後の記憶がますます薄れつつある現在、日本人はいかにして〈在日〉と出会うのか。その問題についても議論することとする。

【講 演】磯貝治良

「わたしの文学の旅と在日文学のゆくえ」（要旨）

浮葉正親さんを中心に進められてきた科学研究費補助金による3年間のプロジェクトが終了し、私の初期の作品のほとんどがCDに収録され、ホームページ上でも公開された。著者として感謝しつつも、半世紀以上も前に書いた作品に向き合い、正直当惑もしている。大学卒業後、多くの同人誌を渡り歩きながら書いた作品たちは懐かしくもあるが、私が『新日本文学』に発表した、もっとも愛着のある作品群が今回は扱わ

れておらず、その点が残念である。

学生時代、ドストエフスキーやカフカに魅せられ、カミュやサルトルなど実存主義の文学に熱中した私は、仲間と『追舟』という同人誌を作り、小説を発表した。卒業後は『北斗』や『東海文学』という同人誌を渡り歩きながら数多くの作品を発表したが、徐々に野間宏、武田泰淳、長谷川四郎、井上光晴など日本の戦後文学の作品に傾倒した。1966年に新日本文学会に入会してからは、文学を通して社会問題に深く関わる文学運動に邁進した。

私がなぜ在日朝鮮人文学にのめり込んでいったのか。改めてその理由を考えてみると、1957年に新興書房から出た金石範の『鴉の死』に衝撃を受けたこと、また学生時代に影響を受けた実存主義文学が社会参加（アンガージュマン）を標榜していたこと、そして戦後文学とくに第一次戦後派の文学にも同じような傾向が見られることをあげ、説明することはできる。しかし、そのような文学上の理屈よりも、私にとって少年時代の二人の在日朝鮮人の友人との出会いの方が大きいように思える。一人はヨシダカツシという名前（本名は分からない）の同級生で、家の仕事である養豚を手伝いながら32歳で亡くなった。もう一人は申（シン）という一歳下の友人であり、大須事件で死亡した兄を持ち、同じ大学に通い文学についてもよく語り合った。申は在学中に家族とともに第一次帰国船（1959）で共和国に「帰った」。どうやら私の文学の根っこには、その二人との交友があるようである。

在日朝鮮人は存在そのものが政治的である。植民地支配の歴史やそれに起因するさまざまなしがらみから逃げよう、もう少し楽な生き方をしようとしても、在日朝鮮人の歴史性と存在性にまわりついている政治性を払拭することができない。そこから生まれてくる文学は、世代交代によって民族性が弱くなり、日本人の若い世代の文学と変らないようになって、政治性

はなくなると考える。確かに、玄月や柳美里、金城一紀以降、在日の若い作家が登場しておらず、若い世代の文学離れが進んでいるが、若い世代のアイデンティティの葛藤はなくなっておらず、それを小説化するためには、在日が置かれている状況と闘うしかない。過去10年間、在日文学はエアポケットに入ってしまったようだが、在日は4世、5世になっても消えるわけではない。日本国籍をとってもその人のルーツが朝鮮半島にあることには違いなく、むしろ「根生い」の存在になり、複雑な内面を抱えながら日本社会と闘っている。朝鮮半島のルーツを共有する意識がなくなる限り、在日はなくなることなく、在日文学も形は変えながらしぶとく残っていくのではないかと考える。

今日のこの会の案内には、「戦争や戦後の記憶がますます薄れつつある現在、日本人はいかにして〈在日〉と出会うのか」という主催者側の問題提起が書かれている。しかし、私の考えではむしろ、戦後日本人は〈在日〉とずっと出会い損なってきたのではないかと思う。その結果が、最近の北朝鮮や朝鮮高校、あるいは在日朝鮮人に対する否定的な感情とつながっている。そのような指向性が日本人や日本社会にア priori に存在していることに気づかされる。在特会などよりも恐ろしいのは、あのような行動をしない、ごく普通の日本人が北朝鮮とは悪であり、その手先になっている朝鮮高校の無償化など考えられないということがまったく議論もされずに考えられていることである。善意とか理解では〈在日〉とは出会えない。〈在日〉を抑圧しているものは、実は日本人を抑圧しているものと同じである。日本人が〈在日〉と出会うには、そのような権力構造と闘わなければならない。闘いながら歩いていけば、ようやくどこかの十字路で向こうから来る〈在日〉と出会うことができるのではなかろうか。

【コメント】清水良典（要旨）

磯貝さんの作品は『架橋』第8号から続けて読み続けている。今回のプロジェクトの報告書により、1960年代から70年代にかけての磯貝さんの作品をまとめてよむことができるようになった。しかし、その頃に書かれた作品は野間宏や井上光晴の作品に影響を受けた文学青年の習作の域を出るものではなく、その後の磯貝さんはそこから自由になり、どんどん大きくなっていくように思われる。

『イルボネチャンピョク』（1994）は私がそれまで考えていた在日文学の枠組みを越えていこうとする作品であり、『在日疾風純情伝』（1996）は梁石日の『血と骨』に代表される在日ノワール小説の先駆けともいえる作品である。最近の作品でも、「弾のゆくえ」（2005）は自衛隊の海外派遣と在日の問題をからめて書いた作品であるが、常に皮肉まじりの笑いというか黒い哄笑が仕掛けられていて、日本という国に染み付いた体質を拡大鏡で開いて見せ、なおかつ皮肉に笑い飛ばしている。また、「消えた—小説「3・11」」（2012）は日本の名だたる作家たちが3・11をまともに書けなかったのに対して、津波の様子を精霊ガイナが黒い牛の大群になって襲いかかるといふ、まるでギリシャ神話の叙事詩を思わせるイメージが描かれ、悲惨な状況を突き放しつつ暖かく見守るといふ視線で書かれた作品であり、非常に感銘を受けた。

今日、磯貝さんは在日文学の研究者ないしは評論家として知られているが、私は磯貝治良という作家の作家性、絶え間なく小説を書かずにいられないという側面にもっと目を向けるべきではないかと考える。

【コメント】黄 英治（要旨）

私は在日朝鮮人にとっての磯貝治良という面についてコメントしていきたい。先ほどの講演でも言及されていたが、在日朝鮮人とは非常に政治的な存在である。そして、磯貝さんが文学の原質として青春時代に在日朝鮮人に会っていたという点が重要である。朝鮮人を知っている磯貝さんが作家となり、1970年代の日本における韓国の民主化闘争、1980年代の指紋押捺反対運動、2000年代に入ってから南北統一を志向するNPO法人「三千里鐵道」に関わっているということが在日朝鮮人として非常にありがたい。

文学の側面では、『始源の光』（1979）や『〈在日〉文学論』（2004）は在日朝鮮人にとって、自分たちのことが書かれている文学を読むきっかけを作ってくれた貴重な著作である。また、最近では磯貝さんの在日文学論がディアスポラ文学論として韓国でも読まれるようになり、それまで在日のことをまったく知らなかった本国の人たちが在日文学を読み、在日への理解を深めるきっかけとなっていることも忘れてはならない。磯貝さんの小説は、在日朝鮮人のさまざまな生と死を記録する作品を書いている。例えば、「テハギはナグネのままに」（1994）や「路上の詩人」（2005）、「人差し指

の十六歳」(2008), 最新作の「ユニムの場合」(2012)に描かれた在日朝鮮人の生き様, 死に様に深い感銘を受ける。

在日朝鮮人にとって磯貝治良とは, 簡単に言えば「説明を求めない日本人」だといえるかもしれない。在日朝鮮人はいつも説明を求められる。「なぜ日本にいるの?」「なぜ日本人と変わらないのに朝鮮人なの?」「なぜ参政権がないの?」「なぜ朝鮮人なのに朝鮮語が話せないの?」等, 本来日本人が知らなければならないことをいちいち説明しなければならない。うんざりするほどの無知と日々の圧迫の中で生きている私たち 在日朝鮮人にとって, 磯貝さんは〈希望〉である。

